

学界の動向

日本心臓血管麻酔学会第16回学術大会報告

岩 崎 寛*

日本心臓血管麻酔学会第16回学術大会が2011年10月8(土)、9(日)、10(月)の3日間、旭川グランドホテルを会場に開催した(写真1)。

第16回学術大会は、本学会が認定する心臓血管麻酔専門医制度が開始されることに伴い、麻酔科医の更なる専門医の育成・発展と日常の心臓・大血管手術に対する臨床麻酔におけるより高い質の維持を考慮すべく、大会のテーマを「心臓血管麻酔を楽しむ」としました。麻酔科医自身が楽しめる心臓麻酔であることが今後の麻酔科医の将来における発展のキーポイントであると感じているからである。学術集会では招待講演、シンポジウム、ワークショップなど多くに企画がなされた。招待講演は国内外より5名の先生にお願いした。招待講演1は Aman Mahjan (UCLA Cardiac Arrhythmia Center) による「先天性心疾患における術中超音波診断の有用性」で、近年心臓血管麻酔領域で必須の診断手技となっている術中の超音波診断をテーマに小児における先天性心疾患手術麻酔での診断のポイントや手

術手技サポートの要点について解説された。当医局でも新生児や幼児に対する超音波診断のための機器を有しており、その診断のポイントについては大いに参考になった。招待講演2では大北裕神戸大学心臓血管外科教授による「大動脈弁輪拡張、大動脈弁閉鎖不全症に対する動脈基部置換術」、招待講演3では平塚共済病院心臓血管外科高橋政夫先生による「低侵襲に拘った心臓手術および早期麻酔覚醒—麻酔科医と心臓外科医の強い信頼関係をベースに」と題して国内の有数の手術症例数をこなしている著明な循環器外科医により、心臓血管手術における麻酔科医との連携およびその手術進行との関係での役割について、それぞれ大動脈弁手術および冠動脈再建術をテーマに講演して頂いた。また、招待講演4では当講座準教授国澤貞之が留学していたニューヨークで共に臨床を行っていた Alexander Mitthacht (The Mount Sinai Medical Center) を招き「心臓手術における超音波診断」と題して術中超音波診断技術の向上が手術のアウトカムに大きく関与することを具体的な症例呈示にて解説された。招待講演5では当大学保険管理センター川村純一郎教授にお願いして「麻酔と不整脈—自律神経と電解質異常を中心に—」を講演して頂いた。手術中の各種の不整脈に対する診断および薬剤も含めた対応のポイントを麻酔科医に理解できるように解説して頂く好評であった。基調講演として聖路加国際病院心血管センター循環器内科丹羽公一郎先生により「先天性心疾患と今後の方向性」と題して先天性心疾患手術後の長期予後と成人となった後の再手術に焦点を当て麻酔管理上のポイントについて講演頂いた。一方、招請講演としては東海大学鈴木利保教授による「手術室効率化の光と陰—今、病棟が



写真1

*旭川医科大学 麻酔・蘇生学講座

危ない PSN,RRa を用いた安全な病棟管理」和歌山県立医大畑塾義雄教授の「コーチングによる組織マネジメント～医局はどうあるべきか～」と題して、麻酔科医を取り巻く環境および医療安全に焦点を当てて各施設における革新的な取り組みについて講演頂いた。シンポジウムは心臓血管麻酔専門医に必要な脳脊髄の知識、成人先天性心疾患患者の麻酔管理、心臓チームに必要な条件—必要とされる心臓麻酔科医とは—、周術期静脈血栓症、心臓血管麻酔における輸血・血液凝固のトピックス、心保護・臓器保護を考えた心臓麻酔・術後鎮静管理における α - 2 受容体アゴニストの役割の6つ企画され、それぞれの分野に於けるトピックスを取り上げて数名のシンポジストによる講演後に活発な議論がなされた。今回の学術集会のテーマである「心臓血管麻酔を楽しむ」を具体化すべくこれまでにない企画を作成した。まず、国内の心臓血管麻酔に実際に携わっている若手麻酔科医 21 名を選び、臨床教育講演として 30 分程度各得意分野について講演して頂いた。当講座関連からは市立旭川病院山岸昭夫先生「心室中隔欠損患者の周術期管理」旭川医大救急集中治療部鈴木昭広先生「救急領域における TTE・TEE」、国立病院機構東京医療センター杉浦孝広先生「術後心血管合併症」として講演して頂いた。何と言っても最大の目玉企画がウェットラボである。これは豚の摘出心臓を実際に直視、解剖しながら超音波診断との関連画像を学ぶものである（写真2）。この企画を遂行するために当講座では数年前よりアメリカでのレクチャーに医局員（神田浩嗣、朝井裕一、山岸昭夫、吉村学、飯田高史、杉浦孝広、佐藤慎など）を派遣し、講師の

養成を行って準備してきた。募集開始早々定員となりこの企画に対する期待と興味の大きさを感じたが、実際に終了後の参加者より企画の優秀性について賞賛を受け、今後も継続企画を希望する声が多かった。また、超音波診断ハンズオンにおいては旭川医科大学臨床検査・輸血部赤坂和美先生、および中森理江、樋口貴成、柳谷貴子先生の協力に加えて、当講座長島道生、大友重明、丹保亜希仁、高橋圭哉、小野寺美子、五十嵐浩太郎、菅原亜美、松野賢一、林健太郎、田中博志、金木健太郎、鷹架健一、和泉裕巳など多くの旭川医大関連諸先生により好評に終了し当大学の底力をお見せできたものと感じています。その他専門医のための講習、TEEセミナーおよびランチョンセミナーなどが遂行された。

一般演題は 180 題採用し、ポスターや口述にて発表して頂いた。特にポスター会場はこれまでのオープンな会場では十分な議論が出来ていないとの印象があったので、各分野毎に小部屋にての発表形式とした。発表者からは緊張したが十分な静寂の中での議論が可能であったと好評であった。また、会員懇親会も会員自身が楽しめる参加型の会として全員参加によるクイズ形式とした（写真3）。クイズに正解すると来年度のアメリカ心臓血管麻酔学会への参加権などが当たる等の企画および北海道ならではの味覚により参加して戴いた約 840 名の会員に好評であった。

旭川市にて開催された第 16 回日本心臓麻酔学会の年次学術集会に対して、教室員一同、我々自身も楽しみながら、旭川医科大学麻酔蘇生学講座の医局員の心臓血管麻酔科領域に於ける活動を広く国内に示すこと



写真 2



写真 3

が出来たことに加えて、参加して頂いた会員も楽しんで頂けたとの評価を得、成功裏に終了したことは大変嬉しいことでありました。

最後に、本学術集会の開催にあたり、手術の調整など本学よりの暖かいご協力、ご支援に心から感謝申し上げます。